江戸時代の代表的な三大国語辞書の一つ『俚言集覧』の唯一の稿本を『移山伊呂波集』とともに影印復刻。

俚言集覧

自筆稿本版　全11巻

太田全斎編

（已酉）わざ研究会監修　北村孝一解題

鍾馗幟

クレス出版

『俚言集覧　自筆稿本版』――刊行にあたって

『俚言集覧』が、近世の代表的辞書として石川雅望編『雅言集覧』、谷川士清編『和訓栞』とともに広く知られ、江戸時代語の、とりわけ俚諺・俗語の基本文献として不可欠なものであることはいまさらいうまでもない。「鄙俗を先として雅馴を後とし輓近を主とし上古を賓とせり」とする異色の編集方針のもと、語彙数においても同時代の辞書を圧倒する膨大なものである。寛政期から弘化年間まで書き継がれたと推定される稿本は、未刊のまま文久年間には質入れされるなど、さまざまな経緯を経て、旧帝国図書館の所蔵となり、明治三十三年井上頼圀、近藤瓶城により増補のうえ刊行され、広く世に迎えられた。この活字本『増補俚言集覧』は、近年にも何度か復刻され、国語・国文学のみならず歴史学や民俗学など、きわめて広範な分野で今日も利用されており、その影響と学問的貢献ははかりしれないものがあろう。

このように活字本『増補俚言集覧』の刊行はきわめて有意義なものであったが、そこには当然のことながら時代的な制約があり、今日の視点からすると、さまざまな問題が含まれていることもまた否めない。たとえば、その後『俚言集覧』自体の研究が進み、凡例の一部が共通する『諺苑』の出現によって編者を村田了阿としたのは誤りで太田全斎（方）であることが判明し、さらに刈谷図書館村上文庫からは失われた稿本の一部を転写した『移山伊呂波集』が発見されている。また、活字本が稿本の五十音横列という特異な配列を通常の五十音順に改め、小説語などを増補したことによって、利用者にとってきわめて便利なものとなったが、残念ながらその過程で図像に関わるものや「剰記」（各部の末尾に付された百科事典的項目）、書込部分などがかなり意識的に削除された。そして、当時の事情を考えるとやむをえないこととはいえ、少なからぬ遺漏があったことも明らかとなっている。

ここに刊行する国会図書館蔵自筆稿本の影印版は、そうした問題点を克服すべく、〝ことわざ研究会〟の監修により、最新の研究成果を取り入れ、『移山伊呂波集』を収録するとともに、後年の再製本の際の誤りをただし、可能なかぎり稿本の原形復元につとめた。

本書の刊行により、活字本に欠落した江戸時代の貴重な情報が広く各分野で活用されることを願うとともに、太田全斎や移山らが数十年にわたり心血を注いだ本書の成立過程にも新たな解明がなされることを期待したい。

厖大なエネルギーの結晶

立教大学教授
加藤　定彦

私事から始めて恐縮であるが、三年前、俚諺・金句を集成したささやかな著作物『俚諺大成』（外村展子との共編、青裳堂書店刊）を公にした。江戸時代以前に成立・刊行された、和漢の俚諺・金句の蒐書・注釈書から抽出、五〇音順に排列したものである。対象となったそれらの文献の掉尾を飾ったのが『俚言集覧』であった。抽出するにあたり、厳密であることを期するためには、活字版ではなく、原本によるのが最善――ということで国会図書館に足を運び、請求したまではよかったのだが、出納台に出現した稿本二十六冊の山を眼前にして、途方に昏れざるを得なかった。第一巻の目次や引用書目などをそそくさとメモし、二、三冊にざっと眼を通しただけで、早々に退散するというていたらくで、結局、小著には口絵に稿本の写真一葉をのせるのみで、あとは井上頼圀・近藤瓶城の校訂した活字版『増補俚言集覧』（明治三十三年刊）によることにしたのである。

小著は俚諺・金句に限定して集成したものなので、『俚言集覧』全体の学問的成果を吸収してはいない。しかし、小著編纂の過程だけでなく、機会あるごとに『俚言集覧』の存在の大きさは痛感させられている。つとに俚諺蒐書として著名な『諺苑』草稿（春風館本）から同書清書本（天理本）、さらに和漢の俗語などを孜々と増補・注釈していった編者太田全斎の情熱には圧倒され、現代人には見られない、近世人の測り知れないエネルギーの結晶を前にたじろぐばかりである。

今回、ことわざ研究会により解題とともに影印・復刻されるとの朗報に接した私は、粛然として襟を正し、じっくりと稿本『俚言集覧』をわが机上に置いて、そこに注がれた厖大なエネルギーを反芻しようと思っている。

広く研究者に奨める

評論家
紀田　順一郎

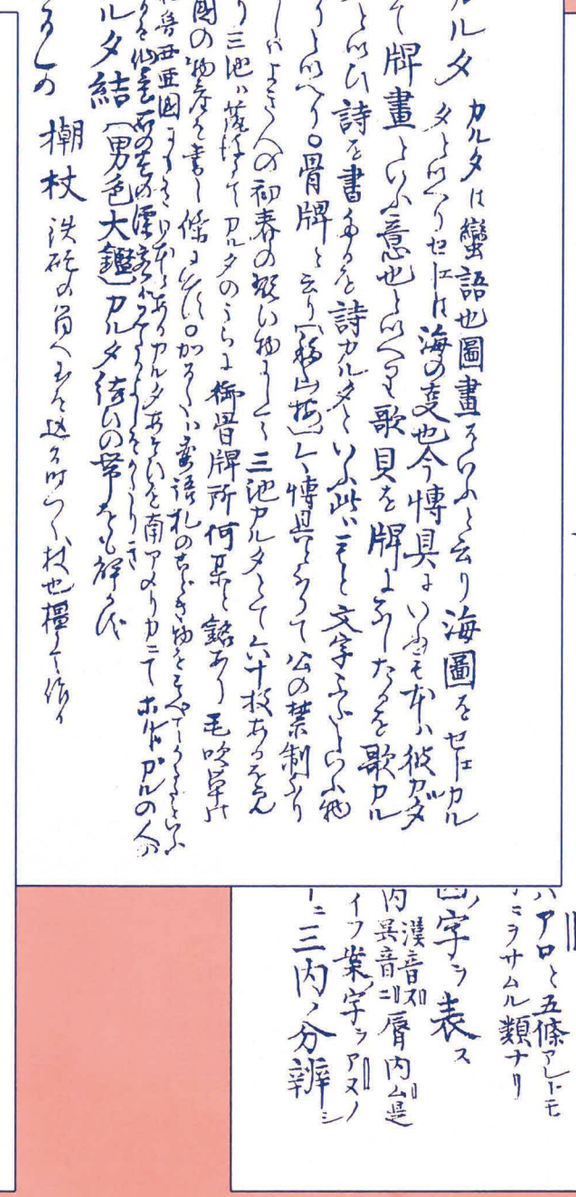
太田方の『俚言集覧』は約二百年前の近世中期の辞書でありながら、国語辞書として「現役」であるという興味深い存在である。編纂当時行われていた口語を網羅している点、時代別国語辞典としても活用し得る。無論、歴史的辞書であるから資料としての考慮は必要だが、独自の個性と実用性を兼ね備えた辞書として愛用するに足る。

この辞書はまた、近世にありながら近代的な言語関心と、方法論によって編纂された辞書の萌芽として、書誌的にも興味の高いものである。最近の書誌学の関心は、いわゆるリファレンス・システムの歴史という方向にあるが、『俚言集覧』は五十音による音素検索を本格的に採用した辞書のメルクマールであるために、私などは従来からその原由をめぐる研究的関心をいだき続けてきた。

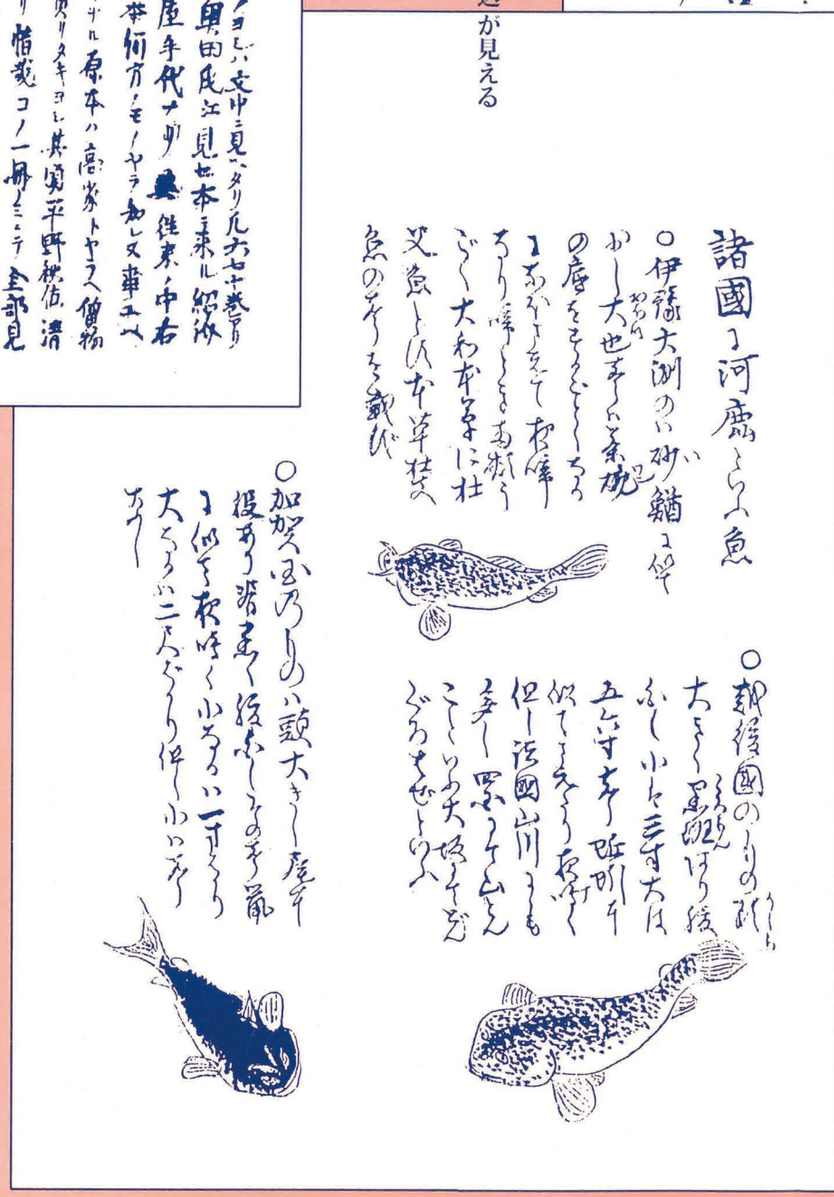
しかし、明治年間に印行されたものは原本の忠実な翻刻というよりも、利用の便を考慮した編集の手が入っており、原本とは多少の距離があった。このたび、さいわいにも保存されている自筆稿本の影印版により、本来の姿を窺い得ることになったのはまことに喜ばしい。これにより、『俚言集覧』という名辞書の意義や本質がさらに明らかになることを信じ、江湖に推薦するものである。

内容見本と特色

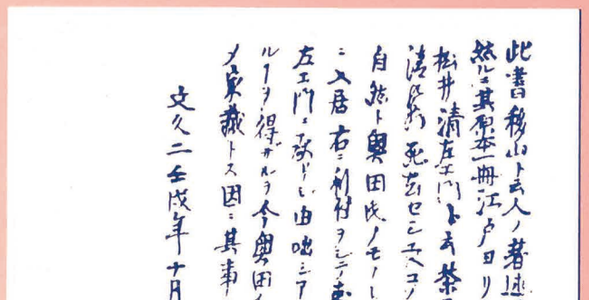
凡例▼
ユニークな五十音横列による配列を説明



▶「カルタ」の項
活字本にはない書込が見える



▶加部剰記
挿図と剰記の多くは活字本未収録



▶移山伊呂波集
『俚言集覧』伊部上巻の転写本の識語

此集總ル五十音ヲ以テス五韻アイウヲ以テ五集エオ
ナス阿集伊集偪集衣集於集是也 毎集横列アカサタナヲ以テ次
序ヲナス毎列一母ノ言ヲ首母トスアギレ「ハ足也キレハ切也」ハ一母ナリ
二母已上ノ言ハ言第二文字亦横列ノ韻ヲ以テ次序
ヲナス次母阿韻次母伊韻次母偪韻次母衣韻次母於韻是也

俚言集覧　自筆稿本版　全巻構成

第一巻	凡例・引書、あ・か
第二巻	さ・た・な
第三巻	は・ま・や・ら・わ
第四巻	移山伊呂波集、い・き
第五巻	し・ち
第六巻	に・ひ・み・り・ゐ
第七巻	う・く・す・つ
第八巻	ぬ・ふ・む・ゆ・る
第九巻	え・け・せ・て・ね・へ・め・れ・ゑ
第十巻	お・こ・そ・と
第十一巻	の・ほ・も・よ・ろ・を、解題

造本体裁
A5判（縮小版）／上製函入／クロス装

配本予定／定価（分売不可）
第一回配本　第一巻～第六巻
揃定価八二、四〇〇円（本体八〇、〇〇〇円）
一九九二年九月二十五日刊行
第二回配本　第七巻～第十一巻
揃定価七二、一〇〇円（本体七〇、〇〇〇円）
一九九三年一月二十五日刊行
全十一巻揃定価一五四、五〇〇円（本体一五〇、〇〇〇円）

◇国文学関係書籍の御案内

影印（仮名つき）錦繡段・三體詩・古文真寶

久富哲雄編・解題

江戸期に刊行された貴重な振仮名つき漢詩文集を復刻、『錦繡段』『三體詩』は、天和版と元禄版の二種類を収録。近世の文学作品読解の参考となる文献集。　定価一〇、三〇〇円（本体一〇、〇〇〇円）

芭蕉研究資料集成

明治篇全9巻　久富哲雄監修・解説

俳諧の世界のみならず日本文学全体に多大な影響をおよぼした芭蕉の、没後三百年を記念し、人物・作品の価値ある研究書を集成する。大正篇全11巻も刊行の予定。

揃定価一〇九、一八〇円（本体一〇六、〇〇〇円）

〒103 東京都中央区日本橋小伝馬町14－5　メローナ日本橋
☎〇三（三八〇八）一八二一　FAX〇三（三八〇八）一八二二
株式会社　クレス出版